

## 研究ノート

# フェミニズムとアカデミア

— 日本心理学会第69回大会ワークショップ報告 —

森	永	康	子
飯	田	祐	子
小	川	眞	里
風	間		孝

## はじめに

本稿は、2005年日本心理学会第69回大会で森永が企画したワークショップ「フェミニズムとアカデミア」を紙上で再現したものである。1960-70年代の第二波フェミニズムは、社会運動にとどまらず、学問にも大きな影響を及ぼし、従来の理論構築や研究者の立場、研究姿勢、研究方法などに対する疑問や新たな視点を提供するものとなった。それは、また、「フェミニズム」あるいは「ジェンダー」を共通のキーワードとし、さまざまな学問領域を超えた学際的な発展の可能性をもたらしてきた。このワークショップでは、日本文学（飯田）、科学史・科学論（小川）、ゲイ・スタディーズ（風間）および心理学（森永）という4つの領域から、フェミニズムがそれぞれの学問や個々の研究者にどのような影響をもたらしたかを語る。

## 飯田祐子（日本文学）

私は、文学研究という領域に属しております。そこで今日は、文学研究におけるフェミニズム、ジェンダー・スタディーズについてお話をさせていただきた

と思います。さて、はじめに前提として振り返っておきたいのは、アカデミズムの中でフェミニズムやジェンダー・スタディーズに向けられた典型的な批判が、フェミニズムやジェンダー・スタディーズの、学問としての客観性や科学性を問題にしてきたという点です。ジェンダー・スタディーズは、ジェンダーに焦点を絞った分節を試み、客観的で科学的だと思われる問題の偏向性を明らかにするものでしたが、逆に、そのような問題の立て方こそが偏向しているという批判を受けてきたと言えると思います。ジェンダー・スタディーズは、客観性に欠けるというわけです。

それでは、文学研究ではどうだったかと言いますと、文学の特殊性としてまず確認しておきたいのは、政治的なものに対して非常に懐疑的というか慎重というか、よりはっきり言えば嫌悪するような性質を持ってきたということです。文学は、政治や経済といった歴史性や社会性が顕著な領域から一線を画すことで成立してきました。もとは娯楽と同値だったわけですが、芸術の一部分となるに従って、変化のない普遍的な価値を担う領域としての位置を築き、またそうした自律性を期待されてもきました。その普遍性が、個に直結する形で描かれてきたということも重要な特徴です。個の問題が普遍を代表するというのが大前提とされ、個がその限定性を障害としないで普遍性に到達することが志向されてきました。少し立ち止まって考えれば、ある作品を書いた作者は、書いた時代、あるいは自身のジェンダーやセクシュアリティなど、色々なレベルで偏りを持つわけですが、その偏りが問われることはありませんでした。かりに問題にする場合にはいかに超越したかということを示すことが目的となってきたとあってよいと思います。文学研究は、文学と密接に価値を共有してきており、アカデミアとしての文学研究の特殊な事情として、客観性という言葉が重視されてこなかったことが指摘できると思います。主観的であることがなおかつ普遍的であるという図式が生きていますから、科学性や客観性ということが言われない代わりに、個を核として普遍性や真理性が語られるわけです。他の、科学的な客観性を重要視している領域とはちょっと違ってい

るわけです。

さて、そういう文学研究にフェミニズムが入ってくると、主観的なものが普遍性を代表しているという前提にひびがはいるわけです。個の語りが歴史的にどういう場所にいたかという、言説の偏向性について問題にすることになりますから、非常に大きな抵抗がありました。受け入れられるためには、文学も政治性を持っているということが広く認識されていかなければならなかったのです。文学に政治性があるということは、フェミニズムだけではなく、カルチュラル・スタディーズやポスト・コロニアリズムなどによって拓かれた視点です。現代ではそのような立場での日本文学研究が非常に増えているのですが、15年ほど前の日本文学研究には、まだカルチュラル・スタディーズも達していませんでした。フェミニズムも実は80年代の真ん中あたりに入ってきていますから、ざっと20年くらい前の状況では文学の政治性を問うという視点は、ほとんど無かったと言っていいと思います。20年の間に順々にフェミニズムやカルチュラル・スタディーズやポスト・コロニアリズムといったものが流れこみ、それぞれの言説は偏りを持ち、その力学にコミットしている、政治性を持っている、ということが語られるようになってきました。非常に大きな転機がこの20年の間に起こったかと思います。根本的に、普遍的な価値を文学が担っていること自体を問い直すことになったので、その中で、フェミニズム批評も、一つの偏向性を示す立場・方法として市民権を得て、今ではジェンダーという言葉もセクシュアリティという言葉もフェミニズムという言葉もそれほど抵抗無く受け入れられるようになってきました。

ここで簡単に、フェミニズムの研究が、文学研究の中ではじめにどういうことを問題にしたのかを振り返ってみたいと思います。まずは、「女の視点」で問い返すということが言われました、80年代後半から90年代の初めあたりですね。作者も読者も、「ニュートラルな存在ではない」ので、女の読者である、あるいは研究者である主体の自らのジェンダー・アイデンティティをはっきりさせて、それによって作品の語り手なり作者なりのジェンダー・アイデンティ

ティに向かい合っていく、というやり方です。フェミニズム批評の歴史を辿ると必ず言われていることですが、男性の批判と、女性の発見という、二つの方向性がありました。日本でも同様です。まず男性の作家の偏向性が指摘されましたが、20年位前まで、文学研究では作品や作家を賞揚することが重要視されていきましたから、それゆえの抵抗がありました。歴史や社会学の中では、研究対象について批判的な視点を投げかけることは問題にならないはずだと思います。しかしかつての文学研究の中では、研究対象に批判的な視線を投げかけることはほとんど禁忌でありまして、それがこの20年間で変わりました。これも文学研究の中の重大な変化だったと思います。女性の発見はそれに比べると、女性の作家、女性の登場人物に価値を見出していくようなやり方でしたから、今申し上げたような研究対象を賞揚するという大きな枠組みの中では比較的受け入れられやすかったと思います。

そのような形で進んできたのですが、「女の視点」を打ち出す研究の姿勢に対しては、その後文化的な本質主義に陥っているという批判が出ました。女性の研究者も色々な形で懐疑的な態度を示したことを確認しておきたいと思います。私が繰り返し思い起こしてきた女性の研究者の発言を、いくつか挙げたいと思います。どれも90年あたりです。石丸晶子さんは「『女の視点』というものは、その女性の家父長制社会における苦しみの有無を計る踏み絵なのか」（「『女の視点』・『男の視点』覚え書き」『日本近代文学』42、1990）というかなり厳しい言葉で、批判しています。「女の視点」という言葉が、たった一つの方向性に女性を縛っていくこと、女性を一枚岩的に捉えてしまうことに対して違和感を表明した意見だと思っています。高桑法子さんは、「素朴に〈女〉として実在していただけるくらいならそもそも文学研究の世界に入ってくるわけがなかった」（「文学と女性学」『日本近代文学』44、1991）と仰ってまして、これは、「女の視点」を語って研究するというが、そんなに単純に女に同一化できるのかという問いです。これはたいへん大事な問題だと思っています。もちろんこの批判を受けて、非常にニュートラルな普遍性に向かってしまったら、た

だ元に戻るだけで非常に反動的なことだと思いますが、そうではなく、自らの属性を固定的に捉えることに対して違和感が示されていると考えれば、忘れてはならない重要な問題が含まれた批判であったと思います。種田和加子さんは「ことさら「女性の視点」を意識するとかえって読みが偏狭になる」（「複数の性への夢想—フェミニズム文学批評との距離」『日本近代文学』47、1992）と。この方は、フェミニズム文学批評の可能性を探る文章の中でそのように仰っています。文学というものは普遍的なものに通じているはずだという前提があるから、このような批判が出ました。漆田和代さんは、「フェミニズム批評は、どうあれば、それが文学的な営みでありうるのか」（「フェミニズム批評に引裂かれて」『群像』47-10、1992）と仰っていて、これも同じように、文学というものの価値とフェミニズム批評の折り合いがなかなかつかないことを示しています。どちらも92年に、女性の研究者から出された疑問です。前提になっているのは、やはり文学に普遍性を価値として見出したいという立場です。あるいはこのようにも言えると思います、文学に何かしらの逸脱性や開放性を認めたいという立場。出来上がった制度があれば、それを壊していく、解体していく、そこから逸脱していく、そこから解放されていく、そういうことをするのが文学だ、という期待です。文学における個の扱いとも関わっておりまして、個と社会を対立させて、社会や制度的なものから逸脱していくというあり方をこの特殊な個が示していると考えたいわけです。特殊な個に普遍的な解放の一つのあり方が示されている、と。「素朴に〈女〉として実在していただけるくらいならそもそも文学研究の世界に入って」こないという言い方も、逸脱性や解体性を文学に期待する立場によるものです。

こうした批判から15年たって、私が現在思うことは、偏りがあるということは、逸脱性と必ずしも矛盾しないということです。ある種の逸脱をある種の偏向性として説明すれば、矛盾なく議論できるわけです。文学というものに逸脱性を読み取っていくことへの興味は、それをある種のねじれや歪みのようなものとして理解するというかたちで、私も持っています。特殊な時間や場所のあ

りかたを明らかにしていけば、必ずしも研究対象になっている文学を賞揚しなくても、文学というものが置かれた場所、文学に期待されてきた価値と照らし合わせながら文学テクストを分析することは可能です。普遍性をもった偏向性や中心からの逸脱を読みたいという読者の期待の呪縛と、偏りが意味していることを研究することを重ねていくことが必要だと思っています。ある種の逸脱性を社会化して、むやみに可能性としてそれを読むのではなくて複雑さとして読んでいくことが重要ではないかと思います。

さて次に、90年代以後について、ジェンダー・アイデンティティのあり方の複雑さへという観点から話したいと思います。まず重要な展開として、歴史学のジョーン・スコットなどによって、ジェンダーをレトリックとして理解する視点が提示されたことを確認しておきたいと思います。ジェンダーは、非常に抽象的に歴史を構成するレトリカルな二項対立として機能しています。現実の男や女とは水準を分けて、「男」と「女」という枠組みが、家族や恋愛という社会的な枠組みや、さらには政治や経済の枠組みに適用されていることが指摘され、文学研究においてもレトリックとしてのジェンダーの機能を研究する方向に進んできていると言えます。アイデンティティについて考える場合も、パフォーマンスとしての側面からジェンダーと主体の関係を捉えるという視点がジュディス・バトラーなどによって拓かれました。主体は、ジェンダーの意味を再生産し、またときにはパロディ化して動的に演じ続けているという理解です。ジェンダーとは非常に規制力の強いものですが、その枠組みは普遍的に確立しているものではなく、主体がそれを演じていたりパロディ化したりする中で動的に作り出されているわけです。そう考えれば、個々の主体とジェンダーとの関係を不即不離のものとして繋ぐのではなく、その関係性を複雑に抽出していくことが重要だということができるでしょう。重ねて忘れてはならないのは、徹底して多様性を抽出することです。女の中にもいろんな女がいるということは非常によく言われることです。同じように、私の中にも女というカテゴリーとの距離のとり方は様々あって、完全に頭のとっぺんから足の先まで

女であるのかといえ、もちろんそうではない。ジェンダーは、私のアイデンティティを構成しているものの一つです。女というカテゴリーとそれぞれの主体との関係のとり方も非常に多様だということも考えていかなければならないと思います。その意味で、主体を立ち上げるのではなく、それがうまく立ち上がらないことについて積極的に考えていいのではないかと考えています。最近、生きにくさの問題などが論じられていますが、それと同じように、文学では語りにくさの問題が考えられると私は思っています。語りにくさは、言明することへの躊躇やためらい、あるいは過剰に饒舌になっているが中心に辿り着かないというあり方など、さまざまに複雑な語りの形態のなかから見出すことができます。語りにくさに目を向けることで、語る主体が、制度的に確立されている「女」は「男」というものの意味と複雑な関わり合いを持っていることを明らかにしたいと思っています。またそのような意味で言うと、自分の中にあるいくつもの多層化した自己が問題になります。ジェンダー化した自己とジェンダー化しにくい自己みたいなものの対立も当然あります。主体と一口に言っても、決して一つにまとまりきっているものではないはずです。他者としての自己の問題がそこにはあります。あるいは、自分の身体は必ずしも自分でコントロールしきれものではないという自分の身体の他者性。立ち上がる主体を理念としないことで、様々な水準で、自己の他者性の問題について考えていくことができるのではないかと考えています。

さて、次に批評という領域に話をうつしたいと思っています。ここまで文学研究とフェミニズムについてお話してきましたが、文学にまつわる言説には、批評と文学研究という棲み分けが実はあります。そして、文学研究ではジェンダーやセクシュアリティの視点が確実に市民権を得ていますが、批評ではもうひとつ、という事があります。文学研究者の内藤千珠子さんの指摘を参照したいと思います。内藤さんは、仲俣暁生という批評家が、「男だけ、あるいは女だけの個の問題のさらに先にある、共に生きたり、時には共に戦ったりする仲間のこと気がなるのです」として「ジェンダーフリーな新しい小説の可能性」を

求めながら、ある作品について「問題意識はほくらオトコの問題とどこかでシンクロしている」と書き、「男女の性以前にあるふわふわした感じがとてもよく描けている」という評価を与えていることを一例として取り上げ、「だが、逆説的なことに、この文脈では『ジェンダーフリー』という語の使用によってより強固な形でジェンダー化が遂行されてしまっている。同時にここでは、想定されているのが『ほくらオトコの』男性の読者共同体であることが暗示されている」と批判しています（「男性化する批評」『早稲田文学』30-3、2005）。ジェンダーフリーの可能性を語ろうという文脈で、「僕らオトコの」と迂闊に言うてしまう。あまりにも迂闊なわけで、こういった迂闊さが起こりうること自体が非常に問題だと思います。「さらに先に」、「男女の性以前に」といった「先に」「以前に」といった表現で、ジェンダー化していない外部を想定して、外部に触れているものに可能性を見ろという考え方です。これでは文学の逸脱性を期待してそこに可能性だけを読んでいく、かつての文学観と全然変わっていません。このような形で外部性を発見してはそれを良しとしているのでは、真ん中にあるジェンダーの問題は残されたまま、何も変わらないことになってしまいます。このようなことが依然起こっているわけです。

とはいえ、批評の領域にも、ジェンダーについて考える上で重要な指摘があります。ジェンダーやフェミニズムについての論考も多い大塚英志さんの、「物語」論に目を向けたいと思います。大塚さんは、「『物語』が『イデオロギー』にとって代わり、社会や現実を設計する枠組みとして援用されて行くという事態が確実に生じている」といい、「唯一そこで生き残ってくるのが『文芸批評』という一番非社会的で非生産的な言語技術だと思うのです。（略）物語化する社会を抑止するための、言ってしまうえば社会的な技術としての文芸批評、もしくは文芸批評そのものの社会思想化が、この後文芸批評の領域で進んでいくのであれば、それはある意味で一定の役割を果たすことができるはずです」と、文芸批評を社会化しようと言っています（『物語消滅論—キャラクター化する「私」、イデオロギー化する「物語」』角川書店、2004）。前提として文芸批評が



社会と切り離されたものとして想定されていることがここでも確認できるのですが、大塚さんはそれを批判し、文芸批評を物語分析のための技術として位置づけ直しています。非常に単純で暴力的な「物語」、あっちが良くてこっちが悪いというような単純な勧善懲悪の「物語」に人々が非常に易々と動かされてしまうことを憂慮し、物語を分析する態度が非常に重要だと言っています。メディアリテラシーの問題系とも重りますが、そういう形で文芸批評を考え直すべきだと問題提起しているわけです。

自民党の一部を中心として、昨今では、厳しいジェンダー・フリー・バッシングが生じていますが、ジェンダー・フリーについてバッシングするような言説もまた、非常に「物語」的、つまり単純で複雑な現実をどのようにして解決していくかということについては全く触れないで、非常に反動的な理念を繰り返すようなものになっていると思います。そういったものの物語性、また物語としてどのような問題があるのかを分析していくことが重要だろうと思います。そういった現在と絡みながら、フェミニズムとアカデミアが共に、共にというよりそもそも領域を分けずに、既存の棲み分けみたいなものを超え全体として問題を考えていくことが重要だと思っています。

### 小川眞里子（科学史・科学論）

先ほど文学の飯田先生の方から、あまり客観性は問わないというご発言がありました。科学分野というのは、まさに客観性に収斂すると言ってもよい分野です。問題は、そのような分野でジェンダーがどのように反映するのかということです。科学研究の出発点は客観的な観察であるということであれば、男がしても女がしても同じはずで、そこに違いがあってはならないという前提があることになります。しかし、これから色々お見せしますように、実は必ずしもそうではありません。観察にはずいぶんジェンダー的偏り、個人的偏りがあります。科学研究だからと言って観察が中立で普遍的、客観的であるとは限りません。

私たちの網膜は解像度という点では、片目でおよそ100万本の視神経ですから100万画素くらいです。今デジタルカメラにしても300万とか600万画素あることからいうと、結構アバウトな部分を経験によって補って見えています。この点を了解していただければ、ジェンダーが介入する余地、或いは時代的な様々な偏向がそこに介入してくる余地も、多少認めていただけるのではないのでしょうか。そして、数学ではなかなか難しいのですが、科学でも、男女観が変われば、生物に関係する分野、あるいは霊長類学あるいは考古学でも人類初期の男女の関係を問題にしますので、性に関係する分野についてはかなり様々な分析がされる可能性があります。

次に、フェミニズムが科学を変えるかということです。ここで注意していただきたいのは、フェミニズムは必ずしも女性のフェミニストだけによって支えられているわけではないことです。男性の中にも多くのフェミニストがいるはずで、科学研究の場合は男性のフェミニストが女性をエンカレッジしてきたという歴史的事例もあります。フェミニズムが科学を変えるかということになると、まるで女性だけが頑張ってきたみたいに思われるかもしれませんが、しかし、男性と女性のフェミニストがともに科学を少しずつ変えてきています。女性科学者が増えることによって、研究スタイルや研究対象に変化が出てきているということです。しかし、それは単純な増加ではありません。17世紀後半から18世紀にかけてドイツでは、天文学者のおよそ15%が女性でした。これは今日の比率と比べてもかなり高いものです。世の中の状況によって、女性が科学に参入する率はずいぶん違います。戦争になって男性が出払えば、女性の医者育成しなければならないとか、この頃のような少子化になってくれば女性の科学者を育てようとか、社会的なことで女性はある意味、予備軍なのです。科学分野で人材が足りなくなれば女性も入ってきなさい、男性だけで十分足りるのだったら家庭で奥さんになって男性を支えなさい、というような枠組みは、どの国でもかなり明確にあったし、あると思います。最初に、科学知識の偏りの是正という点でいくつかの例を引いてみたいと思います。そして最後に、男女

が共にそれに参画することによって、いっそう新しく公平で持続可能な科学の話へと進めたいと思います。

まず、図1をご覧になって何だとお思いになるでしょうか。これを学生に「何だと思う？」と問うと、木の枝を取り払ったものとか、棒に虫が二つ付いているとか言います。これは、N.R.ハンソンという科学哲学者が示したとてもうまい例です。要するに私たちは、この観察から自分の網膜には全然映っていないのだけれども、その木の背後にお姉さんと妹が、あるいは熊が木にしがみついているというような想定をするのです。目では見えないところに想像を膨らませて与えられた場面を合理的に解釈するということを、私たちは実に簡単にいたします。そのような想像は私たちの経験の裏打ちから生じます。私たちの「見る」ということを、経験が様々に支えているのです。ですから、科学的な観察といっても私たちは一層合理的な解釈を得るためには、見えないことを見えるが如く解釈することは、いくらもあるということなのです。熊が片手を離してはだめです。しかし、同じ熊でも木を下向きに降りようとしているところというのは、図1に合致しているのですが、なかなか思いつきにくいものです。さまざまな場合が想像できることは重要なことです。私のお気に入りの例は赤ちゃん熊です。お母さん熊が木にしがみつきの、その背中に赤ちゃん

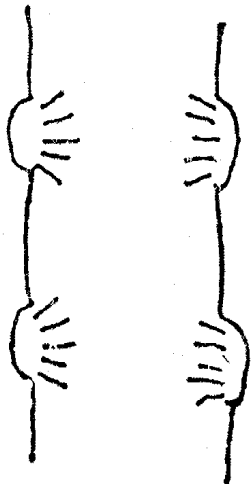


図1 何に見えますか？

ということもありうるわけです。見えない部分も想像で補って、私たちは一層合理的な解釈を求めようとするのです。ほんの一例からですが、見ることが解釈することだということがお分かりいただけるのではないかと思います。

次にお目にかけるのは、アンドレアス・ヴェサリウスの1543年の『人体の構造』という書物の解剖図の一枚です（省略）。ヴェサリウス自身が描いたわけではないのですが、最も近代的な形で人間の身体を視覚化した書物として有名なものです。この一枚

は、骸骨の様子からして、ハムレットというあだ名をつけられたなかなか忘れ難いものです。彼は骨格に関して男であるとか女であるということを明確には意識していません。彼は学生にパドヴァ大学で講義をする時に、性器の部分だけ取り外しができる模型を使って医学的説明をしており、特にこれが男の骨格だとか女の骨格だとか言わないのです。ところが18世紀になりますと、明らかに骨格の構造に対して、男の骨格、女の骨格、特に女らしさが美しい肌とか服装のみならず、骨になってしまっても女らしいということこそが本質的な女らしさだという解釈がされて、男女を骨格として描き分けるようになりました。

図2-1は女性の骨格図として、当時たいそう賞揚されたもので、図2-2は男性の骨格図です。肩幅が随分違いますし骨盤の大きさが違って描かれています。さらに面白いことに男性の骨格の横に、それを象徴する形で馬の絵が描

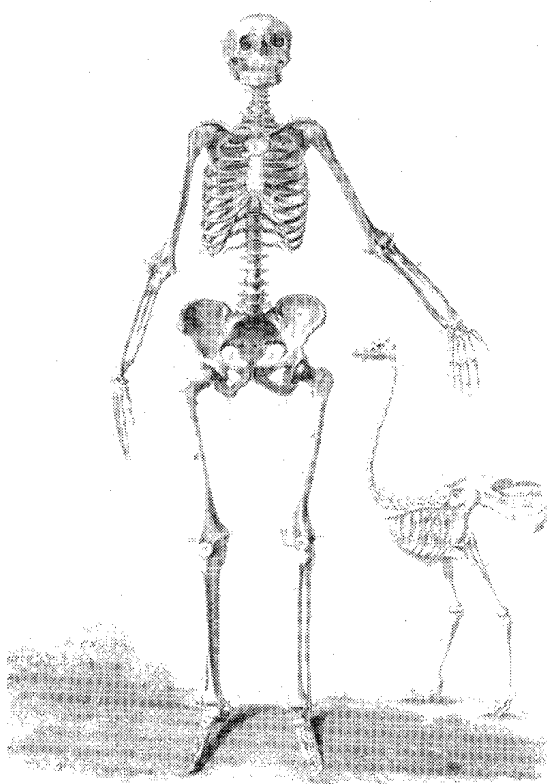


図2-1 女性の骨格図

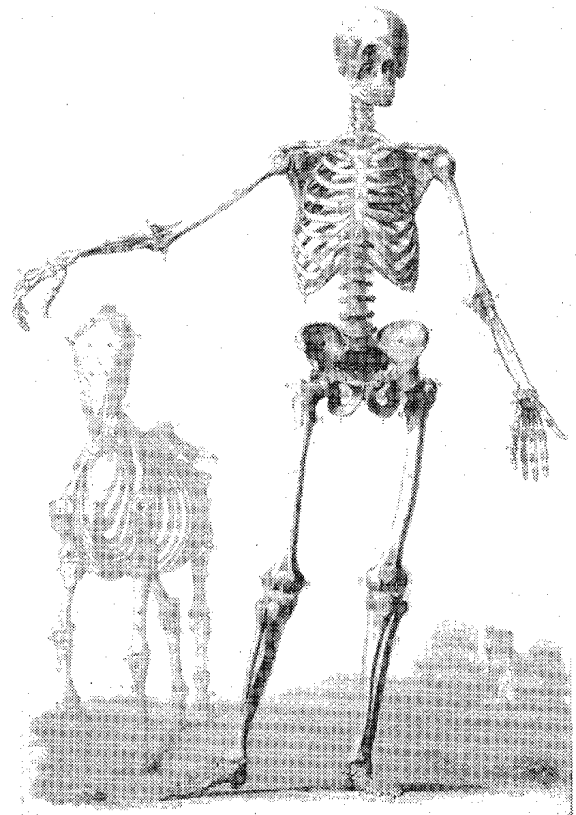


図2-2 男性の骨格図

かれています。18世紀の『ガリヴァー旅行記』にガリヴァーが賢い馬の国に旅する話があったり、あるいは博物学者ビュフォンの動物分類では人間の次に位置づけられるのは馬で、決して類人猿だったりしません。馬は賢く、騎士の友と考えるなら、男性の横にサラブレッドが描かれるのも頷けるわけです。それでは女性の横にダチョウが描かれていることに、どのような意味が込められていたのでしょうか。ダチョウは現存する動物の中で最大の卵を産みますので、頭の大きい男児を出産するということが女性に対して期待されていたと考えられます。

骨格図というのは、客観的にそのとおりに描けば時代を通していつでも同じだと思われがちですが、実は違っていて、その時代に女性に対してどのような期待がかかっているかが、骨格図にも如実に反映しています。女について、骨になっても女らしい慎み深さということが意識されない時代には、男女の骨格を描き分ける必要はなかったでしょうが、18世紀になると骨格という外からの変化を受けにくい本質的なところでの違いが強調されるようになったのです。さらに、人間の女性であれ、或いは動物の世界にあっても、「メスは慎み深くあるべきだ」というのが18世紀の一つの性的な規範でした。動物園に行くと、ライオンのオスとメスはすぐ見分けられるとしても、キリンを見てあのキリンはおしとやかだからメスだと、今は言ったりしません。しかし18世紀には、ひとたびメスということになると、「完全な淑やかさ」を強調する描き方が前提になります。オランウータンを描いた絵も、時代とともに少しずつ描き直されて一層女らしくなっていきます。そしてフランスを代表する18世紀の世界的な博物学者ビュフォンが描かせたポンゴつまりオランウータンとなりますと、枝に優雅に横座りという姿勢、胴体も幾分すっきりとし、美しい伸びやかな手足や指が女らしさを強調しています。科学的観察にもジェンダーは反映するのです。私たちは網膜に映る以上のものを、想像を交えて見ているのです。女性の子宮を描いたヴェサリウスの図には角が描き込まれています。彼は女性の子宮に角がはえているというローマ時代の医者ガレノスの言説をそのまま叩き込ま

れて観察していますから、解剖をしてその実態を見る機会があっても、その思い込みが抜けることなく、実際にはありもしない角がはえた観察図を残しています。

そして、フェミニズムが科学を変えるか、ということですが、女性科学者の活躍というのは皆さんもう十分お分かりになると思いますが、配布資料はノーベル賞を受賞した人物一覧です。表には9名の女性受賞者が出ていますが、現在は11名です。最初の3人を表で見てくださいと1903年、35年、47年は、いずれも夫と共にノーベル賞を受賞しています。要するに、この科学の世界でノーベル賞を受賞するほどの業績を上げるには、基本的にはまず夫とのチームワークで自分も顕彰されるという形になるわけです。次の63年、64年、77年をご覧くださいと、これら3人の女性は何れも単独で、夫とは独立に別分野で研究してノーベル賞を受賞しています。そしてここまでの6人はいずれも結婚をして子どもを持ち、妻としても母としても十分に評価された上でのノーベル賞です。80年代の3人の受賞者はいずれも独身女性です。83年、86年、88年、彼女たちはフェミニズムという運動が無ければ、果たしてノーベル賞を受賞できたかどうか疑問視されるところです。これについては『学燈』（2002年3月号）に書いたものをお配りしていますので、ご覧いただければと思います。女性研究者であれば妻でも母でもあらねばならないという二重規範という大前提を抜きにして、独身の女性も評価されるようになったことが画期的だったと言いたいのです。フェミニズム運動以降、女性は二重規範から幾分解放されて評価され、その他にも、例えば女性の大学進学率上昇とか、理学部にどれくらい女性が進学するようになったか、女性科学研究者がどれくらい増えてきたかというような、数字で表される様々なデータをご覧くださいれば、フェミニズムが科学に及ぼした影響をお分かりいただけると思います。

先ほど言いましたが、女性だけでなく男性のフェミニストも貢献しています。その例を挙げてみましょう。イギリスの結晶学ですが、お配りしたプリントの1915年を見てくださいと、ブラッグ、ブラッグと書いてあります。こ

これは夫婦ではなく父と息子なのです。ブラッグ父子という形で呼んでいますが、イギリスの結晶学の大御所といえる人物で、ブラッグは完全に自分をフェミニスト、男女平等主義者であることを標榜しておりまして、女子学生に対して、自分の研究室に来れば必ず男女同じように扱って一人前の研究者にするということで、実に優秀な研究者を育てています。星印を付したのが女性研究者ですが、例えば第一世代の上から3番めキャサリン・ロンズデールですが、彼女はイギリス王立協会の第1号の女性会員です。1945年に初めて王立協会に女性会員が誕生しました。そして第二世代の上から2人めのドロシー・ホジキンですが、イギリス人にして初めてノーベル賞を受賞した女性です。そして第二世代の上から6番め、ロザリンド・フランクリンは、DNAのX線結晶解析でワトソンとクリックに非常に重要な情報を与えた女性として知られています。彼女はノーベル賞を受賞するまでは生きておりませんでしたし、独身だったということもあり、1960年代に彼女がノーベル賞を受賞する可能性は残念ながらありませんでした。それはともかく、これらイギリスを代表する優秀な3人の結晶学者はブラッグの研究室から誕生したのです。

科学知識の偏りの是正についてですが、例えば医学ですと、女性の身体は長い間男性の身体で代表されてきました。例えば薬の治験も男性のほうが単一な集団として検査しやすいので、基本的に男性で投与量が決まると、体重に関する補正を行う程度で、女性のホルモンバランスというものは殆ど無視されているということがあります。新薬臨床試験で女性の身体について配慮がされるようになるのは比較的最近のことです。例として鎮痛剤の成分であるアセトアミノフェンは、女性の場合は非常に排出されにくいのです。ですから男性と同じ基準で投与しますと過剰投与になるのですが、正確なデータの裏付けは後回しです。次にお目にかけるのは、世界22カ国の乳がん検診ガイドラインです。これは1998年の表で、日本の厚生労働省もこのところ変わってきましたが、世界有数の科学技術立国である日本だけが、当時「視触診のみ」であったというお粗末な状況を示しています。確かに私たち日本人は欧米の女性に比べれば乳が

んにかかる率がやや少ないとは言え、日本の女性はなぜろくに検査を受けることもできなかったのでしょうか。科学の用い方は社会的なものなのです。女性特有の医療である乳房外科というものが広く知られるようになるのはごく最近で、ずっと産婦人科の医者が自分の守備範囲外で診察してきたといった歴史があり、大変残念なことであったと思っています。

類人猿学に関しては、研究に女性が参入することによって大いなる進展がもたらされました。ただし、女性とだけ言っては問題です。例えば餌付けをして行われているニホンザルの研究は、欧米の研究者から見ると非常に奇妙に思われたようです。西欧で伝統的に踏襲されてきた研究スタイルと全く違ったからです。女性が研究に持ち込んだのも、新手法でした。そうした女性たちは、いわゆる西欧の正当なアカデミズムから外れたかたちで人生経験を積んできて類人猿学に参入したが故に、それまでの男性が思いもよらなかった研究手法を編み出すことが出来たのです。女性霊長類学者としてジェーン・グドールというチンパンジー研究者や、ダイアン・フォッシーというマウンテンゴリラ研究者が有名で、後者は映画にもなっています。こうした研究者が誕生することによって類人猿学は非常に大きな躍進を遂げたのです。考古学に関して、「男性狩猟者」は広く行き渡った強固なパラダイムでありまして、とにかく男性が狩りをして、カモシカなりを獲ってきて、みんなで分け合って食べてきたのだと考えられてきました。女性はそれを与えられるのをただぼんやり家で待っていると看做されてきたのですが、考古学研究の中で、そうではなく、女性が植物採取を通じていかに食糧供給に貢献したかが、最近明らかにされてきています。摘んでくるだけ、と言われるかもしれませんが、どれに毒があってどれに無い、どれがおいしい、どうしたら食べられる、ということは長い経験の蓄積があって初めて出来ることで、決して簡単なことではありません。狩猟動物が、毎日のように食卓に出ることはありえない話で、それはごくたまに運ばれる大ご馳走であって、一般的に人々の食生活を支えてきたのは女性による採取物なのです。すなわち植物性の食物によって初期人類は支えられてきたことが再評



働かれつつあるということです。

まだ言い残したことは山ほどありますが、『フェミニズムと科学／技術』（岩波書店、2001）という本を書き、そこで触れていますので、ご覧いただければと思います。男女雇用機会均等月間の標語だったものですが、「個性は性を超えて」という言葉が好きです。女性だって大胆な人もいるし、男性だって臆病な人もいます。女性のマラソン選手のようにふつうの男性では到底かなわないほどに長く走る人もいれば、編み物の上手な男性もいますし、様々なのです。個性のバラエティを、性というたった二つの区画に閉じ込めてしまうのは非常に大きな間違いだと思います。科学というアカデミアにおいても性はもちろん、様々なキャリアを持った人が、そしてエスニックな背景を言えばさまざまな人種の人が参入することによって、一層、十全な大きな未来を切り開くことができるのではないかと考えております。

### 風間 孝（ゲイ・スタディーズ）

私は、社会学の中で、ゲイ・スタディーズを研究しています。今日は、その立場からフェミニズムとの関係について考えていることを3つの観点から、話したいと思います。一つめは、第二波フェミニズムがゲイ・スタディーズにどのような影響を与えたのかということです。二つめは、フェミニズムの中で、男と女の間には性愛が成立することが当たり前であるとするヘテロセクシュアル・フェミニズム（ヘテロ・フェミニズム）がどのような形でセクシュアリティ、ジェンダー・アイデンティティを位置づけてきたかを考えたいと思います。そして、最後に、セクシュアリティ研究の中にフェミニズムおよびジェンダーの視点を入れることがどうして重要なのか、どうして切り離せないのかということをお話したいと思います。

第二波フェミニズムからの影響を考えるために、同性愛者の社会運動の歴史について簡単にふれておきます。同性愛者の社会運動は、19世紀後半にドイツで始まりました。当時のドイツでは、刑法175条で男性同士の性行為が処罰の

対象とされており、その条項に反対するために社会運動が起こりました。そのときに刑法に反対した根拠は、先天的な精神の病である同性愛というのは、医療の対象であって、法で処罰するのは馴染まない、というものでした。しかしながら、同性愛を医療の領域に配置しようとする議論は、後に同性愛者を苦しめることとなります。同性愛が性的逸脱・倒錯という形で医療化されたためです。アメリカ精神医学会では1973年に、WHOでは1994年に、疾病のリストから除外していますが、現在でも、同性愛を医療化する見解は力を持っています。家族にゲイである、レズビアンであると伝えると、精神科に行きなさい、カウンセリングを受けなさいというように、治療の対象とされることは、現在でも珍しいことではありません。

ドイツで始まった社会運動は、ナチスによって徹底的に弾圧されることとなりますが、第二次大戦後はアメリカに引きつがれ、1960年代末には同性愛解放運動という形をとることとなります。その中では同性愛は持って生まれた病気というよりは、フロイトが言った多形倒錯という概念に影響を受け、あらゆる人間の中には同性に対する性的欲望が存在していて、今の社会はそれを抑圧している強制異性愛の社会であり、それを解放していくという主張をとるようになります。また、さまざまな少数者の運動や反差別運動と連帯しながら運動が進められるようにもなります。この交流の中にフェミニズムのコンシャスネス・レイジング・グループ(CRグループ)との交流もあったと考えられます。CRグループとは、第二波フェミニズムの特徴の一つであり、女性が集まり、個々人の経験や抱えている問題を話し合っていく、その中で実は個人の問題というよりも、女性に共通した問題があるのではないかということを見つけていく実践です。女性が抱えている問題を、個人の資質に還元するのではなく、社会的政治的な問題として考えていくということでもあります。この思想は、「The personal is political」という言葉で象徴されてきたものです。

CRグループは、ゲイの運動にどのように取り入れられたか。例えばゲイであることをカミングアウトすることは、現在の日本でも容易なことではありま

せん。カミングアウトに対する不安が、もしその当人だけが抱えているのではなく、多くのゲイに共有されているのであれば、その背後には同性愛を嫌悪する社会、性差別の社会があるのではないか。CRグループは、このような発想を可能にするものだったと言えます。

また、セクシュアリティを考える上での大きなパラダイムの変化が、1970年代に起こっています。その視点を最初に明確にしたのが、ジェフリー・ウィークスというイギリスの社会学者の著書『カミングアウト』という本です。たとえば、日本で同性愛の話をする時、しばしば男色の歴史が持ち出されることがあります。しかし、ウィークスは、セクシュアリティとは「特定の文化の中で生み出され複雑な歴史的諸力によって形成される」ものであることを明らかにしました。たとえば、男同士の親密な関係は古代ギリシャにおいても前近代の日本でも一貫して存在しています。しかし、それは現在とは、違った形をとっていたわけです。同性愛者として自分のことを規定するという事は、近代になって始まったことですし、かつては男性間の親密な関係には年齢差が必要で、少年を成人男性が教育するという形の中に性的な関係が含まれていたわけですが、現在ではゲイ／レズビアンというアイデンティティも存在していますし、同性間の親密な関係に年齢差は必ずしも必要ではありません。このように考えると、まさに社会的歴史的な影響を受けて、今の「同性愛」という現象が存在するのであり、それは古代とか前近代とは明らかに違ったものであるということです。

この視点は、やはり第二波フェミニズムにおけるジェンダー (gender) という概念の発見に影響を受けたものと考えられます。ジェンダーという概念は、男と女の性差は社会的文化的につくられるという考えにもとづいています。実際に、ウィークス自身もフェミニズムの刺激を受けて始められたということ、この著書の中で述べています。同性愛／異性愛の話をする時、何が本能で何が本能から外れているか、何が自然な性的欲望で、何が自然に反した欲望なのか、しばしば語られますが、ウィークスの社会構築主義のアプローチは、セ

クシュアリティは本能や自然という形で片付けられるものではなく、社会や文化や政治、歴史的なインパクトを受けて今の形が存在するということを述べているわけです。また、女性が問題なのではなく、女性が置かれている社会構造自体を問題にするという女性学やフェミニズムのアプローチと同様に、ゲイ・スタディーズは同性愛自体に問題があるのではなく、なぜ同性愛者が今の社会の中で嫌悪されてしまうのかということを考える学問として生まれてきました。このような点にもフェミニズムからの影響、もしくは相互作用があると考えられます。

それでは、二つめの内容、ヘテロ・フェミニズムとクシュアリティの関係、すなわち男と女の間を前提とするジェンダー中心主義と同性愛との関係について考えていきたいと思います。ヘテロ・フェミニズムの中では、例えば女が男を欲望する時には、自分のことを女だと思っているから男を欲望する、という形で、男を欲望することと自分が女であることを等号で結んできました。ここでの性的欲望を「クシュアリティ」と呼ぶなら、クシュアリティとジェンダー・アイデンティティがセットになって考えられてきたと言えます。しかし、クシュアリティ研究は男に惹かれるのは女であるというジェンダー中心主義的なヘテロ・フェミニズムに対して異議を申し立ててきました。ヘテロ・フェミニズムの前提に従えば、男性同性愛において、男が男に性的に惹かれるのは、自分のことを女だと思っているからだ、ということになります。女性同性愛も自分のことを男だと思っているから、女に惹かれるということになります。このような考えに対して、クシュアリティ研究が明らかにしたのは、男性同性愛というのは、男として男を好きになることであり、男を性的欲望の対象にすることと自分が男であると自認することとは両立するということです。ヘテロ・フェミニズムでは、クシュアリティとジェンダー・アイデンティティがセットで理解されていましたが、切り離して独立に考えるべきであるとクシュアリティ研究は主張したのです。

ジェンダー中心主義には、男は女を、女は男を好きになるという形で、異性

愛を前提とする考え方（異性愛主義）が背後にあります。このような点から考えると、ヘテロ・フェミニズムにはセクシュアリティをジェンダーの問題として捉えるジェンダー中心主義が存在するとともに、二つのジェンダーの間に性愛が生じるという異性愛主義があると思います。それが前提として理解される時、同性愛者はその規範から外れた存在になり、同性愛についての誤解を生み出すことにつながったと考えられます。

最後に、セクシュアリティ研究の中にフェミニズムおよびジェンダーの視点を入れることがどうして重要なのかについて話したいと思います。近代の性規範がどのように作られてきたかを考えるため、ここでは二点ほど視点を提示したいと思います。まず、男女間の非対称性はどのように作られてきたのか。産業資本主義の発達によって男と女の間での非対称性が生じたという説明の仕方があります。それまで家内での生産が中心だった時代から、産業資本主義の発達とともに、工場や事務所での生産が中心になっていき、住居と生産の場が分離されるようになります。すなわち、居住空間いわゆる私的領域と、労働空間いわゆる公的領域が分離されていくようになります。その中で、公的領域、つまり家庭の外で男が働くようになり、私的領域に女が閉じ込められるようになっていきます。その結果、男は家庭の外で能動的に働く存在、活動的な存在であり、女は家庭の中にいる受動的、非活動的な存在という形での意味づけが与えられていきます。このような生産様式の変化の影響を受けながら、ジェンダーが作り出され、非対称的な関係が作り出されていきます。これは男女間の性的な関係にも影響を与えるようになっていきます。性的な関係を持つ時に、主導権を男がとることが多いということは、男が能動的・活動的、女が受動的・非活動的というジェンダー役割の影響を無視することはできないと思います。

近代の性規範において重要だと考えているもう一つの点は、ミシェル・フーコーというフランスの歴史・哲学者が提示した生=権力という考えです。フーコーは、前近代は人を死なせることによって権力を保持したが、近代社会は人の生命に働きかけることによって権力を作動させた、と『性の歴史』の第1巻

で述べ、生命に働きかける権力のことを生＝権力、バイオパワーと名づけています。別の言い方をすると、生＝権力とは、健康や公衆衛生等に働きかけることで、生を増殖させる権力のことであり、人口＝国力になっていくという時代に力を持ったと言ってよいと思います。その中で、生殖を担うセクシュアリティ、異性愛に価値を与える異性愛主義が生み出されていきます（しかし、異性愛の中でも、生殖につながらないセクシュアリティ、例えば膣とペニスの結合以外のセクシュアリティは否定的に扱われます）。異性愛が同性愛よりも上に位置づけられ、同性愛を含む非生殖的なセクシュアリティが周縁化されていきます。

ここで、ジェンダーにおける非対称化と異性愛主義の関係について考えてみます。異性愛が価値あるものであると主張するためには、女と男という二つのジェンダーが確立していなければなりません。二つのジェンダーは、男と女の非対称性を作り出すとともに、異性愛主義を生み出すために、作り出されたと言ってもよいでしょう。ということは、異性愛の中には、男と女の非対称性が組み込まれていることになります。このように考えると、ゲイ・スタディーズを含むセクシュアリティ研究が問題にする異性愛主義について考えるためには、二つのジェンダーの確立と非対称性という視点が当然必要であるし、一方でジェンダー研究やフェミニズムも男と女が常にセットでなければいけないとする異性愛主義が男と女の非対称性を内に含んでいるという問題意識を持つ必要があると思います。そういう意味で、フェミニズムとゲイ・スタディーズを切り離すのではなく、セクシュアリティの問題とジェンダーの問題を関連づけながら考えていくことができないうか、というのが私の問題提起です。

### 森永康子（心理学）

心理学の立場からフェミニズムが心理学にどのような影響を与えたかを紹介したいと思います。まず一つは、フェミニズムによって「ジェンダー」という概念が出てきましたので、これを用いて、心理学では盛んに色々な研究がされ

るようになりました。ジェンダー役割態度、ジェンダー・ステレオタイプなど、非常に細かい研究がたくさんされるようになってきたということ。二番めとしては、心理学の研究そのものの見直しというものも進められてきました。例えば個々の研究の中に埋め込まれてきたジェンダー・バイアスの指摘、そして異なる研究方法の提唱、これは主に質的な研究というのが提唱されてきました。三番めは、もっと大きいもので、心理学そのものに存在するジェンダー・バイアスが指摘されたということです。

今日の話は、研究の中に埋め込まれているジェンダー・バイアスの指摘を中心に紹介したいと思います。どのようなものがあるかと言うと、元来学問は男性によって動かされてきたわけで、これは心理学だけではなく学問全体の話です。心理学も、例えば大学の学部ですと半分以上は女子学生ですが、それが大学院になると男子学生が多くなり、最後の研究職になると殆ど女性はいなくなるようなシステムができています。ここで注意していただきたいのは、「男性」は生物学的な男性という意味ではなく、その社会や時代で優位な立場にある者、言い換えれば「男ジェンダー」を意味します。女性でも男ジェンダーを背負っている人は結構いるわけで、そういう「立場」だと思ってください。

心理学には色々な研究方法がありますが、主なものは実証的研究、おそらくこの学会で発表されている研究の殆どがこの実証的研究で、それは仮説を持ち、数量化したデータをとり、最後に統計的検定による仮説の検証を行うというものです。これが心理学では一番たくさん使われています。なんと言っても、こうした方法で研究すると非常に論文が書きやすいのです。日本の心理学はアメリカからの影響が非常に強いのですが、アメリカの学者は論文を書かないと食べていけないので、実証的研究をやって論文をいっぱい書く。その影響で日本の研究者もこの道に走っていくわけです。私も学部の一年生の頃に心理学研究法の授業で「実証的な方法が心理学の研究方法だ」とよく聞かされ、さらに、その時痛いほどよく聞かされたのが、「心理学は科学である。科学には客観性が必要なのだ」というセリフです。私も学生の頃には納得していました。

しかし、このような心理学の研究のプロセスそのものにバイアスがある、という批判がフェミニズムによってなされたわけです。どういうことかと言うと、研究のあらゆる段階に社会や文化、時代、個人の価値観が入り込むということです。例えば研究テーマの選択の時にも、個人や時代の価値観が入り込めます。心理学でよく行われている母子研究ですが、アメリカでホスピタリズム研究が盛んに行われて、施設に入っている子供たちはどうも色々な発達の問題を抱えている、それは母親がいないが原因だ、と。しかしよく考えて見ると、その当時のアメリカは、第二次大戦が終わり、男性が戦場から帰ってきます。しかし、戦争中、男性がいない間に女性が職場に進出していたのです。そうすると復員した男性は仕事がないわけですから、「女性は家庭に戻ってほしい」ということが当時あったのではないかと私は思っています。もちろん、研究者が意図してそのようなテーマを選んだというわけではないでしょうが。

しかし、こうしたテーマの選択以外にも、実証的研究の実施段階にジェンダー・バイアスが色々と入り込んでいます。よく指摘されていますが、例えば過去には男性のみを対象とした研究を行い、その研究結果を女性に当てはめることが随分されてきました。ただ、今はこういうことはあまりないようです。それから男性実験者と女性参加者というのもよくあることで、大学の教員は殆どが男性で、学部生は女性が多いのですから、当然、男性が実験者で女性が参加者になります。女性から見たら、心理学実験室という名前の狭い部屋の中に男と二人閉じ込められて、何かしなきゃいけない。彼の言うことに従わないと怖いということが暗黙のうちにある状況で、バイアスが入ってくる可能性が大きくなります。それから、測度の偏りといったこともよく指摘されます。例えばリーダーシップを測定するのに、攻撃性、つまり、どのくらい攻撃的かをリーダーシップだと定義して測ると、男ジェンダーの人たちのほうが攻撃性が強いという結果になるでしょう。攻撃性が高い人たちを男ジェンダーと言っているわけですから、リーダーシップを測るということは、男性度つまりどのくらい男性的かを測っているということになります。こうした指摘が、70年代に



第二波フェミニズムが起こった頃にされていました。

その他にも、結果の解釈も批判されているところです。心理学では統計的な検定をよく使いますので、有意な違いだけが重要と見なされる。学部生の卒論を見ていると、統計パッケージを使って、とにかく有意な結果が出ていることを示す星マークが出たら、すごく喜んで、それ以外は全部だめだ、という感じなんです。30項目くらい質問を作って、その中で一つでも星が出たら、そこしか見ないのです。それ以外の29項目何もなくてもまったく関係ない。それはおかしい。でも有意な結果のみを重要と見なし、論文を書いていくようになります。

フェミニズムの立場から重要なのが、論文の中でいつも性差の報告がなされるということです。女性と男性の参加者をとった場合、必ず性差が報告されます。これはおそらく日本では他に人口統計学的な変数でとれるものがあまりないから、そこにしか目が行かないせいだと思うのですが。例えば他の国では民族の割合や宗教とかそういったものが入ってきますが、日本ではこうしたものを聞くのがなかなか難しいため、必然的に性差が重要視されるようになるでしょう。そして性差があると必ず論文の中に報告されます。でも多くの方は、統計的に有意な性差があったというところだけで終わって、いったいどういった原因でその性差が生まれたのかというところまではあまり考えていません。そして読む方もあまり考えていませんから、「性差があった」というと、「やっぱり女と男は違う」「生物学的に女と男はこんなに違うのだ」ということを感じてしまうという危険性があります。

それからもう一つ挙げましたのが、心理学では人の気持ちを数字で表す、5段階尺度とか7段階尺度で表すのが普通です。個々の人間を見失って、平均値だけで「あなたは5段階尺度で3.5ね」という感じで見えていく。では、そうしたもので人間は一体どのくらい測れるのか。フェミニズムの影響を受けた心理学者からは、平均値からどのくらい人間が理解できるのかという批判がされています。

最初に言いましたように、心理学は客観性を強調しますが、あまりに強調す

るためにもしかしたら自分のやっている研究は、社会や文化や価値観など、そのようなものとは全く無関係だという錯覚を研究者に生じさせてしまったのではないか、と感じます。フェミニズムが心理学研究者に求めているものは、これは私の考えですが、自分の研究が女性やマイノリティ、或いは社会的弱者にとってどんな意味を持つものなのかを考えてほしい、ということだと思のです。こう言うと大それたことに聞こえるかもしれませんが、実はそれ程大したことではないと思います。外に出てマイクを持って政治について話せ、などと言っているわけではありません。例えば私は女子大で発達心理学を教えますが、そうするとどうしても小さい子どもの能力、例えば「赤ちゃんというのはこんなに素晴らしいコミュニケーション能力を持って生まれてきたのだよ」ということを話します。しかし、授業を聞いているのはみんな女性。彼女たちがどんな感想を持つかというと、「赤ちゃんって素晴らしい。私も母親になったときには絶対にその能力を犠牲にしないためにがんばります」のようになります。つまり英才教育まっしぐら、というところに走って行きがちなのです。ですから、教えるものの立場としては、「英才教育に走るとどんな問題が子供たちに降りかかるのか」というところまでを突き詰めます。しかし、そうすると次にはどうしても母の問題が出てきて、「母のせいで子どもがゆがむ」という話になっていくのです。そこで、父の話もそこに加えて行き、最終的には「父や母がいなくても子供は育つ」と。そこまでやっていかないといけないのではと思っています。

他の例として働く女性にとってプラスになった研究結果がいくつかあります。働く女性が増加した後、どういう研究が心理学でなされたかという、「問題があるのでは？」という立場にあるものでした。例えば、保育園に通っている子どもはどんな問題を持つのか、家庭は大丈夫なのか、本人は大変じゃないのか、というところが心理学では研究されてきたのです。結局のところ、研究結果は、女性の収入が高いほうが夫婦の関係は良いようだ、保育園に通う子どもは適応力があるようだ、働く女性の心理的幸福度は働かない女性よりも高い

ようだ、という結果が出てきています。でも、この結果を知らない人は多いのです。だから授業で女子学生に「働く女性の方が心理学的には健康だ」と言うと、びっくりします。「結婚して働くななんて大変だ。仕方なく働いているんだろう」と思っている学生が、結構多いのです。「大変なのにかわいそう」と。それを、「そうじゃなくてこういう結果になっているよ」と学生に伝えていく。たぶんフェミニズムの立場から心理学が貢献できるとしたら、そのくらいのことです。大丈夫ではないかと思うのです。そのようなことを伝えていけばよいのではと私は思っています。

ところで、働く女性についての研究が進んできた理由は、一つには社会背景として、女性の学歴が高くなり、社会進出が進んだということがあげられるでしょう。同時に、女性研究者も増えています。こうした研究をする人は殆どが女性です。女性心理学者がこういった研究をしているのです。つまり、働く女性に関する様々な研究テーマは、女性研究者が抱えている問題でもあったのでしょう。しかし、残念ながら、そういう研究をしている人、他の研究もそうですが、自分がなぜこのようなことに興味を持つのか、ということあまり自覚していなくて、そのため「私の研究は客観的な科学的なもの」と思い込み、研究は研究、社会は社会と分けてしまっているのではないかと思います。その辺りに問題があるのではないかと思います。せめて、なぜ私はこんな研究をしているのか、という自覚を持ってほしいと思うのです。

最後に、フェミニズムが心理学にどんな貢献をしたかをまとめたいと思います。一つは、主流の心理学に疑問を投げかけたということです。「心理学は科学だ」という考え方に疑問を投げかけたというところ。二つめは個人の問題に目を向けさせた。集団の平均値では理解できないところに目を向けさせたということ。三番めは問題をこれまでと違う視点から理解する意義を示唆したということ。これらが、フェミニズムが心理学にもたらした貢献ではないかと思っています。

そして、ジェンダーを扱っている心理学研究に対するフェミニズムの視点か

らの課題をあげておきます。日本の心理学の中で、「『ジェンダー研究』と言われるもの」はずいぶん増えているのですが、ただそこでやっている「ジェンダー研究」は、男性と女性の違いを取り上げているだけのように思えます。「ジェンダーという言葉が使われているからジェンダー研究」というものがどんどん増えているような気がします。けれどもフェミニストの視点の一つである「研究結果をどのように利用すればいいのか」までは、まだ浸透していないと思っています。この辺りが将来の課題ではないかと思います。

### 質疑応答

**福富** 「東京学芸大学の福富と申します。風間さんにおたずねしたいのですが、フェミニズムとゲイ・スタディーズとの関係、同性愛者と異性愛者という二項対立的な問題性については理解できたのですが、さらにそれらの周辺の問題についてご教示いただければと思います。例えば、いわゆる性交主義、具体的には膣にペニスを挿入することをもって性交が考えられてきたという問題を考えてみると、レズビアンをどう位置づけたらよいのでしょうか。性交主義を、ある意味では乗り越える装置としてのレズビアンがあるとすれば、その辺りをセクシュアリティの問題としてグローバルに捉えて、それをフェミニズムという観点から考えたときに、ゲイと異性愛、同性愛と異性愛という観点から論じることの限界があるように思います。その辺りをどのように考え直したらいいかを教えていただきたいと思います。森永さん、最後のところでジェンダー研究が増えたのご指摘ですが、ジェンダー研究をどのように位置づけることに関わると思います。仰っていたように、男と女を比べるというだけのジェンダー研究は、僕はジェンダー研究ではないと思います。ジェンダー研究というのは、フェミニズムそのものを内包させ、そういう視点で物事を捉えることがジェンダー研究の一つのファクターだと思います。もちろん、それだけではないと思いますが、ジェンダー研究をどのようにお考えになっているのか、をお聞きしたいと思います。」

**風間** 「私はゲイ・スタディーズの立場から語ったので、今日はレズビアンについて殆ど触れることができず、質問していただきありがとうございます。どうして同性愛者が、近代社会において差別の対象となるかという、生殖に焦点を当てたセクシュアリティが前提となっていることがあると思います。それは少しずつ崩れてきてはいますが、生殖につながらないのは不自然だ、という意見は根強い。そこに入らない一つのセクシュアリティとして、同性愛が位置づけられるわけです。さらに、社会におけるゲイとレズビアンの差異については、ジェンダーの視点を入れないと考えられない。近代においては、男というのは性においては、能動的な性役割を期待されているわけです。例えば、インターコースでいえば、挿入する側となります。男同士の性行為が常にインターコースを伴うわけではありませんが、異性愛者が男性間の性行為を想像するとき、裏返しの異性愛主義として表われます。つまり、そこに挿入行為があるだろうと想像するわけです。挿入行為が伴う場合もあれば、伴わない場合もあるでしょうし、それは異性間でもそうだと思います。ただ、生殖につながるようなセクシュアリティが特権化されているので、それが男性間にも投影されるのです。このように考えられた場合、男同士の性行為においては、挿入される男が存在するということになります。男性役割を放棄した男としてのゲイ、という形で偏見（ホモフォビア）の対象になるというのが私の考えです。もう一つレズビアンの問題でいうと、レズビアンは女性同士の関係、女性は要するにジェンダーにおける性役割でいうと受動ですね。受動側が二人で性行為をすることは、ジェンダー役割においては、とりわけ異性愛の男性にとっては、ありえないことになる。けれども、レズビアンの間では女性同士で性行為が成立します。男を必要としないセクシュアリティが女性間に成立している、それは男性側から見ると脅威になるのではないかと考えています。質問への答えとなっているでしょうか。」

**福富** 「私がお聞きしたかったのは、性交主義が生殖と結びつくことは分かるのですが、そこからの脱却ということをフェミニズムがある種の理論として作

り上げてきたのではないかという問題です。生殖主義という形からの脱構築と言うか、そこから離れたところでの性的な関係もありうるのだということを考えていくと、もう少し論点が変わってくるのかな、と。我々は生殖主義に浸りすぎてきたから、そういったところで狭く性行為を見てきたが、実はそうではないと。もう少し色々な形の性行為もありうるのではないかと。つまりレズビアンを見てどちらが男役だ、どちらが女役だという発想そのものがおかしい訳で。そういうところからの脱構築を、実はレズビアンやゲイたちが提起してくれたのではないかと考えているのですが。」

**風間** 「ご質問のように、同性間の性行為は基本的には生殖とは切り離されたところに存在しています。そこから発展させて、セクシュアリティは生殖に還元されないと主張していくことは、実は異性間の性行為も生殖に収斂されないものとして考えることに貢献することになると思います。現在、少子化が喧伝されるなかで、結婚と生殖の結びつきが強化されていて、少子化を解消するために結婚しましょうということをたびたび耳にするようになってきました。しかし、生殖をとまなわなない結婚もあれば、結婚しなくても子供を産むこともできるはずで。こういう時代の中で、セクシュアリティとは何かについてもう一度考える必要があると思っています。セクシュアリティという概念が人口に膾炙したのは、フロイトの『性理論三篇』という著作によってであると考えられますが、フロイトはその中でセクシュアリティに生殖とは切り離されたところに存在する性という意味を与えていると思います。とりわけ、子供のセクシュアリティと同性愛者のセクシュアリティに注目しているのは、そのためであると考えられます。この本の意義は、人間の性、セクシュアリティは生殖とは相対的に独立した領域を非常に多く含んでおり、むしろそこに人間の性を考えるヒントがあることを示唆しているところにあります。そういう点から言っても、ゲイとレズビアンのセクシュアリティを考えることは、ヘテロセクシャルの性のあり方を考える上でも関係してくるのではないかと思います。」

**森永** 「では、私の方から。単に女性と男性を比較するだけがジェンダー研究

なのか、ということですが、私自身はそう思っていないです。それは単に女と男の違い研究であって、それはジェンダー研究ではないと思っています。社会的に男性や女性は作られたのだ、という視点を持ってこない限り、それはジェンダー研究と言えないのではないかと。単に生物学的な性の言い換えをしているに過ぎないものが、今、結構多いと思っています。答えになっているでしょうか。」

**森永** 「他にご質問がないようでしたら、前もって、『学際的な発展はありえるのだろうか』『フェミニズムをキーワードにして色々な学問の壁を越えて、何か可能性があるのか』を、最後に少しずつ話してみましよう、とお願いしておりました。何かあればお願いしたいのですが。」

**飯田** 「フェミニズムというのは、基本的に学際的に展開してきたと思います。それゆえ、例えば私が文学の領域でジェンダーを論ずる場合にも、社会学や歴史学や心理学の視点を取り入れて、小説を読み分析しています。そもそも文学研究そのものも、他領域の知見を取り入れて、それを援用しながら作品や時代の問題を読み解いてきたので、フェミニズムの持っている学際的な可能性とは、相性がいいとも言えると思います。現在では、文学研究のアイデンティティも非常に揺らいでいまして、その揺らぎを生産的に展開させていくのに、フェミニズムは有効だと思っています。」

「ところで少し外れますが、アイデンティティをめぐって、みなさんに聞いてみたいことがありますのでよろしいですか。ゲイ・スタディーズでは、アイデンティティの問題は今どのように捉えられるようになっていきますでしょうか。議論が進む中で、ジェンダー・スタディーズでも批判が生まれた文化的本質主義については、どのように考えられてきているのでしょうか。ゲイと自認することの陥穽と、ありうる態度について現在の議論を教えていただければと思います。心理学についても同じようなことを伺いたいのですが。ジェンダーの問題を分析の一つの指標として取り入れる時に、参加者のジェンダー・アイデンティティそのものの揺らぎは、心理学の研究の中ではどのように問われて

いるのでしょうか。性差を明らかにするという話が出ていましたが、生きている者とすれば「男」や「女」だけではないと思いつながら生きているわけです。そのような感覚と、たとえば職場において「女」として一括りに扱われることとの間にズレがあるわけですね。参加者は、一応「女」か「男」として答えるようになっていると思いますが、答えるとき、自分自身の感覚だけでなく、女性を自分に当てはめながら女性だったらこう言うだろうと考えたりするわけですね。色々な要素のある自分というよりは、女性の立場からこの問いに答える者として、自分をおある種の方に偏らせて考えているのではないかと思います。性差を明らかにして考えようとする、人を男と女に縛った結果が出るとも言えませんか。それを問う視点は心理学にないのかを伺ってみたいと思います。また、科学史の方でアイデンティティに関わることで議論されていることがあれば教えていただきたいと思います。」

**風間** 「おそらく、アイデンティティの問題は、一つの方向に収斂していくような議論になっていないと思いますので、私の考えを述べさせていただきます。今日話した、社会構築主義のジェフリー・ウィークスが述べているように、『同性愛者というアイデンティティは歴史的社会的に作り出されたものであって、それは同性愛者に備わる本質というものではない』。そういう歴史的社会的な変数を入れて考えなければいけないことは、アイデンティティについて考える時に前提となるでしょう。さらに言えば、フーコーが示唆するように、そのアイデンティティはむしろ、異性愛が優位で同性愛が劣位という形で生みだされたアイデンティティであり、私が同性愛者だとカミングアウトすると、会場にいる異性愛者は優越感を持つようになる。そういう形で作用するのではないかと。だから、カミングアウトはすべきでない、と主張もあります。しかし、どのように異性愛主義を崩していくかと考えた時に、社会的に作られたアイデンティティであっても、戦略的にゲイであるとカミングアウトをすることで、異性愛が唯一の絶対的な性のあり方ではなく、複数ある性のあり方の一つであるということを提示することもできる。ある意味で、ダブルバインドの中



にあって、どのような立場をとればよいという単純なものではないと思っています。文脈に応じて、アイデンティティを提示することもあるれば、その絶対性を相対化していく提示もする、そんな戦略をとりたいと思っています。」

**森永** 「アイデンティティの話、私自身はアイデンティティにあまり興味がないので、実は通り一遍のことしか知らないのですが、臨床心理学の分野で行われているアイデンティティ研究をそばから見てみると、いわゆる女か男か、というアイデンティティについての研究はあまりされていません。アイデンティティはある、ということで、それが中年期になったらどうなるのか。そこは、既に女だというアイデンティティがある上で、母としてのアイデンティティや子どもがいなくなった時のアイデンティティがどうだと、そういう揺らぎの研究がされているようですね。私がやっているような実証的な研究だと、女か男かのアイデンティティを「あなたどうですか」とあまり考えずに、本人が質問紙で性別を聞かれて、女に丸をすればあなたは女ね、という感じで決め付けているというのが多いですね。何かフロアーの方からあればお願いします。」

**福富** 「それは質問紙を作る時に、性別を問うか問わないかというところで問題になるのではないですか。性別を問うことにおいて、大多数の人はどちらかに丸をつけるだろうけど、中にはそこで非常に迷う人もいるだろうし、それに回答したくないという人もいるだろう。そういう人たちにとって、ある意味振り分けてしまうバイアスを作ることはありえるだろうし、非常に曖昧な状況にいる人だって、そこでどちらか強制的に答えることによって意識化されるという意味がある。そういう意味で、私は性差の研究に対して基本的にネガティブに思っています。これは大方の人とは違うと思いますが。おっしゃることはよくわかります。」

**森永** 「では、最後に『学際的な発展はありうるのか』ということで小川さんの方から何かありますでしょうか。」

**小川** 「学際的な問題というのは、先ほどのジェンダーの問題に関連して言えば、科学は本質主義の方に決定的な証拠を出すことを期待されていると言える

かもしれません。例えば生物学なら男女の本質的違いに関係する物質的基盤として何があるのか、という解明に期待がかかるというわけです。ジェンダーという面については、そこから派生してくる問題であるかもしれませんが、文学とか心理学という学問分野に比べると、本質主義の立場がどうしても強くなると感じています。学際的な、ということでは、やはり本質主義と構築主義みたいな対立がどこの学問分野にもあるということだろうと思います。森永先生の発表の中にあつた「平均値って何なの」ということは、私も大変問題だと思います。どちらかという、女の子は言語的な操作能力に長けていて、理系は男のものだという話で、必ず引き合いに出されるのが平均値ですね。平均値というのはほんのごくわずかに違っているだけで、例えば男性の中のバラエティとか、女性の中のバラエティとか、もっと大きな広がりを持つわけですが、その部分は殆ど無視されている。例えば数学でも、最初の10人は男の子だよ、という言い方もあるかもしれないが、その後20人女の子が続くのであれば、千人とか二千人でとつた統計も、平均点でどういう違いがあるのかなと思います。さらに、そこに文化的社会的、或いは教育の場面での様々な支援が加わってくれば、大いに変動するものですから、私も平均値って何だろう、ということについては森永先生と同じ思いです。」

**風間** 「セクシュアリティ研究とジェンダー研究は密接だからこそ、お互いに影響を与え合っている一方で、セクシュアリティ研究の中でもジェンダーについてセンシティブでないという場合もあるし、一方でジェンダー研究の中でも異性愛が前提になることもあり、むしろジェンダーが自明視されればされるほど、異性愛が前提になってしまうという危険もある。そういった点を、お互い自戒を込めながら、関係を作っていけたらと思い、今日は話をさせてもらいました。」

**森永** 「まだ話をしたいことがあります、時間となりましたので、これで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。」

Summary

## Feminism and Academia

Yasuko Morinaga

Yuko Iida

Mariko Ogawa

Takashi Kazama

The second wave of feminism has challenged a long history of academia where a canon of 'a man as a normative human,' has implicitly and/or explicitly dominated for centuries. Feminist scholars have questioned validity of traditional theories, research methods, and relationships of researcher/researched, and developed alternative ones in various disciplines. This article includes four scholars' short talks on how feminism has influenced on her/his research field; Drs. Y. Iida, M. Ogawa, T. Kazama and Y. Morinaga from Japanese literature, science studies, gay studies and psychology, respectively. The talks were addressed at a workshop titled 'feminism and academia' in the 69th annual conference of Japanese Psychological Association, 2005.